



日本最大級の滑走路を備える関宿滑空場(平成17年ごろ撮影)



## 昭和52年に 滑空場長を兼務

日本唯一の公共滑空場として開場した関宿滑空場は、文部省主催の指

つくりと計画しており、建設省から現在の関宿滑空場の位置が候補地として提示されました。  
「44年12月に占用許可が下りたんですが、それからが大変でした。利用の条件として40日以内に整地をすることとされていましたが、でこぼこの地面に加え、高さ3メートルの葎が一面に生い茂っていましたからね。地元の方の協力もあって、なんとか45年12月に運用開始できました」と開設時の苦労を振り返ります。

導者講習会も毎年開催されるなど多くの愛好家が訪れるようになりましたが、利用者が多くなると、今度は安全運航が課題となってきました。

そこでパイダーの設計から操縦まで経験があり、国土交通省の「耐空検査員」として機体の検査も行っている佐藤さんに、関宿滑空場長への兼務辞令が52年に協会から出されます。東京都大田区に住む佐藤さんは、「新橋にある航空協会での勤務に加え週末は関宿へと多忙な毎日でしたが、地元で迷惑をかけるような大きな事故もなく勤め上げることができたのが何よりです」と話します。平成11年に滑空場長を退任後も昨年5月までNPO法人関宿滑空場会長としてその運営に携わってきました。

また、地元の方との交流や全国に誇れる滑空場が野田にあることを知っていただくため、小学生のグライダー搭乗体験をはじめ空のイベントも積極的に開催してきました。こつした実績が認められ、



平成12年のSLJの曲技飛行の様子

平成20年には、国際組織である国際航空連盟(FAI)賞と国土交通大臣表彰をダブル受賞しました。今年で80歳になる現在でも、現役の耐空検査員として職務に就かれています。



## 大イベントSLJ を関宿で開催

思い出に残っていることを尋ねると、「航空スポーツ最大のイベント、スカイ・レジャー・ジャパン(SLJ)を滑空場で2回開催できたことですね。特に平成12年の開催時には、天気予報では開催が危ぶまれるほどでしたが、関係者の願いが通じ、2日間で15万人の方に来場いただきました」と振り返ります。また、17年の2回目の開催では、関宿まつりとの同時開催で花火と熱気球との競演も

話題を呼びました。



## コウノトリ グライダーが空へ

また、関宿滑空場の格納庫に眠っていたグライダーを修復し、野田市が進める自然再生の象徴であるコウノトリの図柄をペイントして、昨年8月にお披露目しました。「翼の黒い部分の模様が曲線なので、塗装が大変でしたね」と佐藤さん。約1年をかけて見事なコウノトリ柄グライダーを完成させました。最後に、「コウノトリもグライダーの滑空も、自然環境が重要という点で共通しています。いつの日かこのグライダーがコウノトリと一緒に野田の空を舞う日が来るといいですね」と語ってくれました。



修復作業を行う佐藤さん